

アート・インクルージョン
「やみくも」そのコラボ企画!

最新情報や詳細はSNSで!

ライブや出る、ワークショップなど一日楽しめる企画が満載!

Ai本祭
10/5 sat
11:00~21:00
長町駅前広場
長町遊楽庵びすた〜リ

このまちで、10年。
〜アートでかける地域とのかけ橋〜

毎月1回にわたり
まちと協働で
アート企画を開催

Ai Month
10/1 ~ 10/31
仙台市太白区
長町一帯
15会場ほか

みんなきてお〜

Illustration: Kosei

じゃじゃ子
じゃじゃ子の名店「食堂び〜わん」さんのオリジナルキャラクターとして誕生。フライヤー中面では長町っ子として長町のまちを案内してくれています。作：コウセイ

【主催】一般社団法人アート・インクルージョン、文化庁、一般社団法人 MMIX Lab、特定非営利活動法人はっぶの森
「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2019文化庁委託事業「障害者による文化芸術活動推進事業（文化芸術による共生社会の推進を含む）」
制作：一般社団法人 MMIX Lab、一般社団法人アート・インクルージョン
【対応】おしるこカフェ】復興庁「心の復興」事業 3.11 伝えるプロジェクト 2019
【協力】公益財団法人仙台市市民文化事業団 仙台クラシックフェスティバル事務局、仙台市中部観光委員会、NPO法人ふらんどばんく東北AGARI、ひまわり会（あすと長町復興住宅自治会）、コミュニティアート・るなはし

文化庁
Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology

課外活動



8月27日の午後、課外活動でメディアテーク5階で行われている展覧会を鑑賞しました。

「宮城独立美術展27th2019」「第20回鳴展」「第38回仙台日曜画会展」の3つの展覧会を各々自由に

観て回りました。作家の三浦一博さんから直接、出品作品の「KU・RA・GE」シリーズの説明が聞くこともでき、多種多様な絵を観ていく中、私たちも世界が広がる感覚になり、これからの創作活動においても参考になりました。

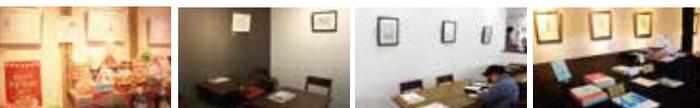
ブンブンアースデイ トミヤ 2019



9月15日、富谷市役所敷地内にて生態系の循環の一員としての「ミツバチ」と世界的に行われている、「アース

デー」の地球環境を考えるをテーマにしたイベント「ブンブンアースデイトミヤ2019」が富谷市で初開催されました。Aiも出店しました。晴天に恵まれた皆さんの出店やステージパフォーマンスで盛り上がりしました。

Ai 本祭に向けて



10月5日、長町で開催する Ai 本祭に向けての準備も佳境に入ってきました。すでに展示している店舗もあり、ステージ練習も本番に向けて熱が入っています。

表紙写真

今年のアートインクルージョン2019本祭のパンフレットの表紙です。みなさんのお越しをお待ちしております。

「アート」でインクルーシブな社会を。

アートな福祉事業所 Ai ファクトリーの特徴でもある多様なカリキュラム。今回は Ai の理事でもあるアートの時間を担当されている、門脇 篤先生にインタビューしました。

白戸：カリキュラムの時間は何をしていますか？

門脇：何をしてもいい時間で、文字通り床で寝ている人もいます。「アート」という名前がついていますが、この場合の「アート」というのは、平面絵画や西洋音楽のような狭い意味ではなく、まだそれがアートと言っているのかどうかかわからないような営み、誰もそれが正確には何なのかかわからず、価値も定まっていような行為やあり方のことをそう呼んで

います。なので床で寝ている人もいれば、アイドルに手紙を書く人、ひたすら青い色を塗る人、仏像や刀を作り続ける人などがいて、各自のそうした「営み」をつづけられるようにしようというのがこの時間です。白戸：その狙いはどういうところにあるんですか？

門脇：「カリキュラム」とか「就労継続事業」とかいうと学校や会社を連想させてしまいますが、本来アートやアーティストはそういった既存のしくみにおさまらない存在であり、ときにそれらをおびやかす存在です。そうした営みやあり方が否定されない場をつくりつづけることがこの時間の狙いです。同時にまだ社会的に認められていないそうしたことの価値を社会に認めてもらえるようにしたいとも思っています。それはだから「アート」が自由にできる社会を作ろうということであって、狭い視点から見れば Ai の取り組みは「障がい者支援」という側面もありますが、私としては障がいがどうかという以前に人として最も大切な欲求である表現しつづける自由を、私を含め誰もが認められる社会にしていく実践で、それが私にとってのインクルーシブ社会です。

白戸：カリキュラムの時間の中であった印象的だったエピソードを教えてください。

門脇：この数年、スマトラ沖地震の被災地インドネシア・アチェの人たちとアートによる被災地間国際交流を行なっています。最初に Ai に連れて行くときに「障がいを持っている人たちとアート活動をしている」と話すと、アチェの人は「ああ、かわいそうな人たちのことですね」と言っていました。しかし Ai で数時間過ごした後、彼は私に言いました。「門脇さん、先ほど私は本当に失礼なことを言っていました。かわいそうな人たちというのは私たちのことです。私はあんなに生き生きと自分でいられる人たちやそうした場を知りません。私はとても恥ずかしい気持ちでいっぱいです」

白戸：このカリキュラムで今後、どんな事を伝えていきたいですか？

門脇：「カリキュラム」とか「伝えていきたい事」とかいうと学校や何かを連想させてしまいますが、この場は誰かが方針を決めて誰かがそれに従うというような場ではなく、ただ「何かしたい」という人がはっきりした方向性も何もなく集まり、それが許される場だと考えています。脈絡なくいろいろなことをやる人がいてもいいし、「何かしたいけど何がしたいのかわからない」という人や「別に何もしたくない」という人がいてもいいと思います。誰かによってすでに何かをすることが決まっている場合は全然「アート」ではないですし、インクルーシブでもありません。だから自分が「嫌だな」「おかしい」と思うことがあったら、とりあえずそう言うみてください。あなたのその感覚はほかの人にとってもとても大事なものかもしれません。



理事兼講師
門脇 篤先生